真っ暗な雨雲

第3編15章

自分の行いによる功績を誇ることは私たちに義を賜物として与えてくださる神に対する賛美を盗み取り、私たちの救いに対する確信を崩壊させるものである。

私たちはキリストを信じて、義とされる能力、あるいは救われる能力を受けたのではありません。キリストは義と救い自身を与えてくださったのです。誰もキリストに接ぎ木されないで、自力で義とされたり、救われることはできません。どうして死んだ人が命の実を結び、悪い木が良い実を結ぶことができるでしょうか。

「雲は無分別な言葉を語り大空を漂う。大空を勝手に飛び交いながら、神々しき光の源に付きまとってその光を覆ってしまう」（李ゾンオ、1341－1371 年）。わが国で最も古い詩集「青丘永言」（1728 年）に出てくる有名な詩の一節です。愛する王の周りにたむろして、彼の（王の）聡明さと公平性を損なわせる(曇らせる）奸臣の群れを雲にたとえて歌っています。「つきまとって光を覆う」というところ表現が心に残ります。どんなに美しく光る月でも、大空を瞬く星の光も黒雲に覆われるとその光は見えなくなります。黒雲に気をつけなければなりません。救いにおいても自分自身の功績を誇ることは、神の恵みと栄光を覆う黒雲のようなものです。ですから私たちはその黒雲で光を覆ってしまうことがないように気をつけなければなりません。

第1節　功績という言葉は聖書に存在しない、大変危険な言葉である

私たちの義を支える柱はなんでしょうか。もし、それが私たち自身の行為ならば私たちの義は神の前で完全に崩れ去ってしまうでしょう。私たちは誰も律法を完全に守ることができないためです。私たちは行いによって義とされるのではなく、ただ信仰によって義とされるのです。このことはいままで既に何度も繰り返して語ったことです。しかし、それでも諦めることを知らない人々はここでも他の質問をしようとします。それは私たちの行為は私たちが義とされるためには不足しているかもしれないが、神の恵みを受けるためにはやはり功績が役に立つのではないかと問うのです。本当にそうでしょうか。

功績と言う言葉は古代教会の著述家たちがよく使っていた言葉です。彼らが何気なく使ったこの小さな言葉一つが、後の世にどんなにたくさん害毒を及ぼしたかを考えると残念で仕方がありません。テルトリアヌスはこの言葉を神の審判に対立する概念として人の行いに最初に適用した人物です。善行の価値は功績と言う言葉を使わなくても他の言葉で十分に説明することができますから、別にその言葉を使って害を及ぼすこともなかったにもかかわらず、強いて彼らがそのような言葉を使ったということは本当に残念なことです。

功績と言う言葉にはそれ自体に強い自尊心の意味を含んでいるため、常に神の恵みの光を遮って、人々に大きな害を及ぼす自負心を吹き込まずにはおれません。だから、アウグスチヌスもその言葉をたびたび使ってはいますが、それが神の恵みの光を覆う黒雲になってしまう可能性があることを悟り、たびたび注意をするようにと呼びかけています。

「アダムにおいて滅び失せた人間の功績はここで沈黙し、イエス・キリストによって、神の恵みが支配すべきである」、「聖徒たちは、自らに何の功績も帰さず、おお、神よ、すべてをあなたの憐れみにのみ帰したてまつる」。

このようにアウグスチヌスは人には善を行う能力がないと語り、功績の価値を否定しています。またクリソストモスもこのように語っています。

「われわれの行いで、何か神の価なしの召しの後に続くものがあるとすれば、それは返礼であり、（われわれが神に返さねばならぬところの）負い目である。しかし、神の賜物は、恩寵であり、恩恵であり、大いなる寛大さである」。

また、ベルナルドゥスもこのように語ります。

「功績については、これを自負しなければ十分であるが、また、功績を欠くならば審判を受けるに十分である」。

少し問題を引き起こすように聞こえるこの言葉を彼は付け加えてこのように説明しています。

「そこで、功績を持とうと心を砕け、あなたは、功績を持つならば、これらが与えられたものであることを知るであろう。あなたは、その実、すなわち、神の憐れみを待ち望め、そうすれば、あなたは貧困と忘恩と自負とのいっさいの危険からまぬがれる。自負なくして功績を欠かず、功績なくして自負を欠かない教会は幸いである」

また彼は「教会は功績について、どうして不安になるのであるか」と問い、このように付け加えています「（救われるための）功績としては、功績では足りないということを知れば足りる」（エゼキエル 36:22、32）。

第 2 節　善行の価値はすべて神が与えてくださる恵みである。

ロンバルドゥスやアキナス（中世のカトリックの神学者たち）のような人々は善行の功績を神と人が分担しなければならないものだと考えています。しかし、それは分担ではなく、人の誇りで神の恵みと栄光を覆ってしまうようなものなのです。そして真っ黒な雲を作って輝く光を隠してしまうようなものです。すでに何度も明らかにしてきたように、人間の行いが神の恵みと肩をならべて競おうとすれば、律法のすべての点を完全に守らなければならなくなります。それは可能でしょうか？そんなことはできないはずです。

たぶん、神が私たちの善行をご覧になられるなら、二つのことだけを見つけ出すでしょう。一つは神ご自身の義であり、またもう一つは人の汚れと偽善と恥辱などです。だから私たちの善行

と言っても、そこに私たち自身のものを見つけ出そうとすれば罪と悪の他に見つけ出せるものはありません。しかも、もし私たちが律法を完璧に守ることができたとしても、私たちにはその善行で何かを保証してもらえる資格をもつことができると言えるでしょうか。聖書はそうは言っていないのです。私たちは命令されたことをみな行った後で、それでも自分を無益な僕だと考えなければならないと聖書は教えています（ルカ 17:10）。

それにもかかわらず、慈しみ深い神は私たちに善行を贈り物として与えてくださり、それを私たちのものと呼んでくださいます。そしてそれを喜んで受け入れてくださるだけではなく、それに対するご褒美まで私たちに与えてくださると語っているのです。神はご自身が私たちに与えてくださった贈り物に対してまでボーナスを加えてくださるのです（ガラテヤ 6:9；テサロニケ第二 3:13 参照）。ですから私たちの善行が価値を持つとすれば、それはただ神から出たものだからです。

一度、常識的に考えて見ましょう。ある一人の貧しい人が寛大な金持ちから土地の使用権を受けました。ところが彼が土地の所有権まで自分のものだと主張しはじめたらどうなるでしょうか。そうなればこの恩知らずな人は金持ちから受けたものすべてを奪い取られて再び無一文になるほかありません。また主人の恵みによって解放された奴隷が自由にされた後で自分が受けたその恵みを隠して、自分は元々生まれたときから自由だと言い出しら、彼はもとの奴隷に戻されてしまうでしょう。だから私たちは私たちの善行の出所を正しく知っていなければならないのです。

そのため次のような三つの態度を持つことが大切です。第一に、受けたもの以上を要求してはならないこと。第二に、恩人である神に返さなければならない賞賛を自分が奪い取ってはならないこと。そして、第三に、神が私たちに与えてくださったものは、すべて神のものであるという意識を持って行動することです。

それでも詭弁家たちは善行の功績と言う言葉が聖書にあると言うことを証明するために力を尽くそうとします。そして彼らが見つけ出した言葉が集会の書 16 章 14 節とヘブライ人への手紙 13

章 16 節です。もちろん集会の書の正典性を認めることはできませんが、その正否は別にしても彼らはその言葉を本来の意味で引用していないと言えるのです。集会の書のギリシャ語本文の内容は次のようなものです。「（神は）すべての憐れみの場所を与えたもう。すなわち、おのおのは己れの行いにしたがって見いだすであろう」。

この言葉を彼らはラテン語でこのように翻訳するのです。「憐れみは、すべての人に、その行ないの功績に応じて、場所を与える」。明らかに誤訳です。そしてヘブライ人への手紙では私たちを欺くために小さな言葉尻を捉えようとします。使徒が語った言葉は「このような犠牲は神に喜ばれ、受け入れられる」と言っているだけです。聖書はときどき、神が私たちに善行を要求され、また私たちの善行をご覧になり、それを根拠に恵みを与えてくださるように語っています（マタイ 25:21、29；ルカ 8:18）。しかし、同時に聖書はもう一方でそのすべての祝福がみな神からの恵みによるものであることを明らかにしてくれているのです（ヨハネ 1:16；イザヤ 55:1）。

だから、私たちの善行が神の恵みを受けるための功績になったり、私たちの信仰が救いと言う保証を受ける根拠となるのではないのです。ただ、私たちの善行は神の贈り物であって、また善行に対する報償は贈り物に対するボーナスと考えるべきなのです。すべては神が与えてくださったものなのですから。

第 3 節　キリストの功績を人の功績と並べて考えてはならない。

ローマ教会の神学は今まで長い間違った考えをしてきました。例を上げればドゥス・スコテゥスのような人は「最初の恵み」と言う言葉を語っています。彼は「キリストが私たちのために最初の恵み、つまり功績を立てる機会を作ってくださった。しかし、この提供された機会を見逃さないことを私たちは今、求められている」と語っているのです。ああ、どんなに傲慢で破廉恥、そして不敬虔な言葉でしょうか。彼らはキリストが私たちの義となってくださったのではなく、私たちが自力で義となる道を開かれただけなのだと語るのです。キリストは私たちの救いを始められただけで、最期は私たちが仕上げなければならないと言っているのです。

しかし、聖書はキリストが世に来られたのは私たちが義となることを助けるためではなく、真実に私たちを義としてくださるためである（コリント第一 1:30）と語っているのです。私たちはキリストを信じて、義とされる能力、あるいは救われる能力を受けたのではありません。キリストは義と救い自身を与えてくださったのです（ヨハネ第一 5:12、ヨハネ 5:24、6:40；テトス 3:7；ローマ 5:1、2；ヨハネ第一 3:24；エフェソ 2:6；コロサイ 1:13）。誰もキリストに接ぎ木されないで、自力で義とされたり、救われることはできません。どうして死んだ人が命の実を結び、悪い木が良い実を結ぶことができるでしょうか（ヨハネ 5:12；ローマ 14:23；マタイ 7:18；ルカ 6:43）。

ローマ教会の神学は聖書はもちろん、アウグスチヌスの教えさえ正しく理解していません。彼ら愚かな者たちの母なる国と呼ぶことができるソルボンヌ学派の人々はすべての敬虔の要点とも言うことができる「信仰によって義とされる」と言う言葉からどこまでも目をそらそうとしています。彼らは実際、信仰によって義とされると口先では告白しながら、後でその言葉を説明して、善行は自由意志の力から出て、全ての善行は功績となると主張するのです（アキナス）。もちろん、ずるがしこい彼らは最初の原因が恵みであると語ることは忘れません。

しかし、これらの考えは後期の詭弁家だけではなく、彼らのピタゴラスとも呼べるロンバルドゥスにも見いだすことができるのです。ロンバルドゥスはアウグスチヌスの言葉を強調しながら、

まるで目が見えない者のようにアウグスチヌスが全ての功績を神の恵みの内に置こうとしたことから目を背けています。信仰がなければすべてのことは罪です（ローマ 14:23）。そして私たちの信仰は私たちの行為を信じるのではなく、神の愛を信頼することなのです。私たちには何も誇るものはなく、ただ神だけを誇ることを私たちは信じるのです（エフェソ 2:10）。そしてこのように堅固な基礎の上に明確に立つとき、私たちははじめて私たちの善行を激励し、また教え、勧めるたくさんの聖書の言葉を正しく受けいれることができるようになるのです（ヨハネ第一 3:8、9；ペトロ第一 4:3；テモテ第二 2:20、21；マタイ 16:24；コリント第二 4:8～10；テモテ第二 2:11、12；ローマ 8:38、39；マタイ 7:20）。

結びの言葉

私たちが義とされることでそこに少しでも私たちの功績を誇ろうとすることは神の栄光と恵みの光を覆い隠すことになります。功績と言う言葉は光り輝く太陽を雨雲が隠してしまうのと同じものです。雲一つない晴天の空のように私たちの信仰生活でも一点でも自分を誇ることがなく、神の栄光が表わされるように願う必要があるのです。ですから自分を誇ることには細心の注意を払いましょう。